

お掃除の人

なりひらいちへいた
成平一平太

四百強の病床を抱える大岳病院の朝は早い。二月ともなれば吐く息は白く、六時を回りきらないこの時間はまだ薄暗い。清掃業者、青空社に籍を置く早番勤務の吉岡達也は、だれもない更衣室で着替えを済ますと洗い場に五本のモップを置き蛇口を開いた。解き放たれた水がいつきに押し出る。そして、自由を満喫したいのか、まるでドラムを叩くかのような音を発しながら飛び散った。シンクだけにとどまらず、辺りの壁までが歓喜の足跡と化した滴の犠牲となる。慌てて達也は水圧を絞る。と、同時に左手で顔を拭う。ほどなくして、びっしよりとぬれたモップを洗濯機に放り込み脱水に掛ける。一、二、三と声に出すことなく数を口にする。二十を数えたと同時に洗濯機のスイッチに手を掛ける。清掃マニュアルに記されたモップの湿り具合が二十秒となっているのだ。

この仕事について半年を過ぎようとしている。それでも、病院本棟の裏口ドアを開けるには小さくはあっても勇気がいる。ドアの向こうには看護師や介護士用の休憩室。中央に伸びる廊下の左側に談話室を兼ねた食堂がワンフロアとなって広がる。休日の昼間には見舞に訪れた家族がくつろぐ場所だが、ここに入院している患者の姿は無い。患者の多くはベッドの中でさえ起き上がることも困難な者ばかりだからだ。これらのスペースに用意されている椅子が全て埋まれば百人ほどがくつろげる広さになっている。もちろん誰も座ってはいない。非常灯の緑の明かりが白い壁を微かに染める。達也はドアを開けると真っ先にこのだけだっ広い空間に視線を投げ、人の気配を探る。家族の見舞いを心待ちにしている患者が暗闇の中に座っているような気がしてならない。誰かがいれば「おはようございます」と、声を掛けるだけのことではあるが、なぜか用心深く辺りを見回してからスイッチに手を掛ける。全ての明かりを点けるわけではなく、この時間に許されているのはこのスペースの三割ほどのみである。それでも、感

じていた異様ともいえる闇の気配は、砂浜に押し上げられた海水が砂の中に染み入るかのよう一気に払拭される。

廊下の長さは百メートルを超え、その入り口の右側には霊安室が設けられている。廊下の厚い鉄の扉は開け放たれている。夜の間に旅立った患者はいなかったようだ。この廊下にも人の影はなくても幾つもの気配を感じる。その気配は、この霊安室の前にとむろし、中央の玄関ホールまでその気配は続く。

影というよりは霧の塊のように見える。人が立っているかのように見えるものもあれば、座り込んでいるかのような形に見えるものもある。どれも身じろぐことはない。何かを訴えるでもなく、ただひたすら誰かを待っているかのようだ。

大岳病院では毎日のように患者がこの霊安室の扉の向こうに運ばれ、裏の扉から霊柩車へと移され退院して行く。正面玄関から退院する患者はいない。

患者のすべてが二十四時間の介護を必要としている。まれに七十歳に満たない患者が入院してくることもあるが、そのほとんどが八十歳を過ぎている。

さまざま理由を抱えた家族が葛藤のすえ、在宅介護ではなく大岳病院を選択しての入院となる。もつともその選択の結果、大きな対価を家族が負担することにはなる。

達也が廊下のスイッチに手を掛ける。天井に設けられた蛍光灯が瞬きを繰り返し、一つ置きに明かりが灯った。同時に霞の塊は、一瞬にして姿を消す。

「おはようございます」

達也の背中に同僚の大垣さと代と宮崎ふみ子が声を掛けてきた。達也より二人ともに七歳年上で来年の春にはそれぞれが七十歳となる。さと代もふみ子も夫に先立たれ、古ぼけたアパートに独りで住んでいる。子供も何人かはいらすが疎遠になっているらしい。年金の支給は受けてはいるもののアパート代と光熱費ですべてが消える。清掃人として得られる糧がなければ生活はなりたない。体が動くうちは働くしかないのだ。安穩とした老後などこの二人には無縁でしかない。着飾ることも旅を楽しむこともない。ただ毎日を生きたことだけに精を費やしている。似た境遇とはいえこの二人の仲が良いわけ

でもない。清掃人としてこの病院で働く誰もが大きな差もなく必死に毎日を過ごしている。そして互いに正面から衝突することもなく、清掃人として助け合い日々の業務をこなしていた。しかし、陰に回れば誰かまうことなくそこに居ない者のことをあげつらっていた。そうすることでしか自分の優位性を保つことができないのだ。下位になればなるほど、一年ごとの雇用契約の更新時に打ち切りを宣告されかねないからだ。

学歴も、誇れるほどの職歴もない高齢者にとつて、清掃という仕事を生活の糧とするほかに選択の余地はそれほどに広くはない。生活に余裕のない者の因果なのかもしれない。そんな中であつて吉岡達也だけは異を放っていた。清掃業者に提出した履歴書にこそ記載はしなかったものの大手の自動車関連企業を定年退職しての選択だった。充分な退職金と親会社の加護を受け、子会社への出向を承諾すれば現役時代と大きくは変わらない年収が約束されていた。達也はそれを蹴つて求人広告を見て決めた再就職先が掃除夫だった。それもなんら保障もないパー

ト従業員だ。

「俺のサラリーマン人生は恵まれたものだった。人に負けまいと努力もした。内助の功にも助けられ、役員という地位も得られた」

達也は部下たちから送られた花束を妻の純子に渡しながら「これからは全く違う人生を歩きたい」と続けた。八か月ほど前のことだ。その結果が掃除夫だった。今ひとつの職業として旅館の下足番も達也の視野のなかにあつた。数多くのチラシを見比べ、ハローワークにも足を運んだが達也がこれと思うものにはなかなか行き当たらなかった。掃除夫も下足番も社会的な地位は低いかもしれない。得られる収入も最低賃金レベルである。それでも達也には、全く縁のない世界であり、これまで接してきた多くの人間とのしがらみを受けることもなく自分を取り繕うことも必要のない自由があると思えた。誰かに見られることがあつても、「まさかあの吉岡達也のはずはない。似てはいるが」と、だれもが疑うことはない。達也も平然と「こんにちわ」と初対面を装って笑顔をふりまくことなど苦とも思つてはいない。

退職をして半年余りが過ぎ、来週から掃除夫の仕事をすることに決めてきたと夕食の準備に台所に立つ、妻の純子の背中に達也が報告をした。

「いいんじゃないの。あなたの好きにしてください」純子は振り向くこともなくため息交じりで口にした。少しは世間体をとめないでもない。しかしこれまで、またこの先も生活に追われることはない。それなりに貯えもある。二人の子供たちはそれぞれが家庭を持ち、いまさら親の出る幕はない。年に一度や二度の旅行ができるくらいの生活は達也が働かなくても望むことはできる。何かに縛られることもなく達也が望むのであればと純子は思った。田舎暮らしがしたいと言いださなだけで済ませたいと思っていた。

清掃人の朝は早い。純子は達也を送り出すためにこれまでよりも一時間早く起きて朝食と弁当を作ることになった。達也も純子とほぼ同時刻に布団から出て純子に「おはよう」と声を掛け玄関を開け郵便受けから取り出した朝刊に目を通す。湯気のたつ湯呑が居間のテーブルにそっと置かれる。ソファに

体を預けながら「ありがとう」と口にし、達也が手を伸ばす。初老期をともに迎えた夫婦の朝がごく自然に始まる。穏やかそうに見えるこの光景にたどり着くまでには三十六年の歳月の積み重ねがあった。ともに大きな病気をすることもなく二人の子供たちもそれぞれが家庭を持ち巣だつていった。今では時折訪ねてくる孫たちの成長ぶりに目じりを下げながら、絵本の読み聞かせや児童公園での遊戯が吉岡家にとつての清涼剤となつている。もつとも口に出すことはなくても離婚騒動の残り火が達也にも純子にも心の奥深くにくすぶっている。

やり手の達也には十分な収入がともなつた。見渡せる世界も広くなつて行く。それらは達也の力量をさらに押し上げることにつながる。その視界の中に女が入ることもある。一時の疲れを癒す場所が家庭だけであるはずもなかった。

細かな砂を巻き上げて湧き上がる清水が岩に貼つく藻を揺らし、静寂さを演出するかのようにな水音を奏でて小川へと落ちてゆく。そんな憩いの領域の行き着く先は大河となり、時には大きな岩に

遮られ禍を振りまくことになる。遠い昔の出来事は今の達也には胸の奥にしまい込んだ夢物語でしかない。

清掃パートの誰もが経済的な問題を抱えている。わずかな年金だけではアパートの家賃にも苦慮することになる。かといって生活保護に逃げ込めば世間体とプライドを天秤に掛けることになる。子供たちへの遠慮もある。兄弟への気兼ねも働く。その結果が七十歳をまじかに控えてもモップを手に廊下と格闘し続けることになる。そしてこの戦いは体力的な状況が許す限りこの先、何年でも続くことになる。

「お掃除の人」

若い介護士が廊下の拭き掃除をしていた達也を呼んだ。清掃後に患者の口腔ケアに使うコップの水がこぼれたことは疑う余地がなくてもその口調はどこか蔑視の念を感じる。

「ここ、濡れてるじゃない」

三十歳そこそこの女介護士が指をさして無言で目を強くする。

「これは今、あなたの仲間が溢していったんじゃない

いですか——」

達也は声に出すことなく床の小さな水たまりに同意を求めながらモップを動かすしかない。一方の女介護士は拭きあがるのを確かめることもなく無言のまま背中を向ける。こんなことは日常茶飯事だ。

「毎日ごくろうさまでございます」

なかにはそんな言葉を掛けてくれる看護師や介護士もまれではあるがいないわけではない。まるで天使のように清掃人たちには映る。望月京子の容姿はそんな形容詞に拍車をかけていた。

昼の休憩は六畳ほどの畳敷き更衣室が達也たち男の清掃人に与えられたスペースとなつている。三十年以上も前のプレハブ小屋だ。すり減った畳を隠すがごとくの上敷きさえも破れが目立つ。そこそこに新しいエアコンの音だけが文化的な空間を造りだしてはいるが、狭い部屋の中の埃を舞い上げるという現実がともなう。

更衣室には部屋の隅に十五個のロッカーがくの字に備え付けられている。此のうちの五個が清掃人用であり、残りはこの小屋の主である食堂部の男子従

業員用のロッカーとなつてゐる。すなわち達也たちは間借りをしているにすぎない。結果として肩身の狭い思いをしながらも、弁当を広げ、つかの間の癒しを求める場所ではない。

「三階の看護主任、俺たちを見下してやがる」

清掃人仲間の津元栄治が握り飯を手に口を曲げた。

「主任だけじゃないさ。三階は看護師も介護士もそろつて俺たちを見下してやがる」

すぐさま松田幸雄が唾を飛ばしながら同調した。

「気にすることはないよ。やつらの不機嫌は見て見ぬふり。聞いて聞き流す。これが一番」

顔を上げることもなく、畳の上に直に置いた弁当箱に箸を運びながら最も年長の竹中義明が口にする。達也はいつもこうした会話に口をはさむことなく聞き役に回つていた。

「奴らはストレスのはけ口を清掃人に求めているだけさ。視点が空をさまよう老人あいてに、口腔ケアやおむつ交換を笑顔でやらされているんだ。誰かにあたらなければやつていられないさ」

「そりやそうだ——。俺たちは床掃除やごみ箱の

片づけが仕事で汚物や医療ごみにはノータッチだからな」

「そうだよ。看護部長は俺たちをばい菌扱いするけど、奴らの方がずーと汚いはずさ」

「男でよかつたつて思うよ」

清掃人の請負仕事の中にはトイレ掃除も含まれてはいるがその性質上、女子清掃員の専業となつていた。

「それよか、西病棟の京子ちゃん。できたらしいよ」

「できたつて、これか？・・・あの女、独り身じやなかつたんだ」

竹中義明の話に松田幸雄が箸を持ったままの手を腹の上に置き、弧を描きながら口にした。その顔には驚きと落胆とが入り混じっているかのようだった。「知らなかつたのか？　もう結婚して一年ちかくなるよ」

「だつてあの女、まだ二十歳過ぎたばかりくらいだろう——」

「なに言つてるんだよ。情報が遅いだけじゃなくて女を見る目もないな。京子ちゃんは来月の三日で三

十だよ」

「うそだろう」

信じられないとばかりに松田が口にし、箸を運ぶ手の動きが鈍くなると同時に慄然とした顔つきに変わっていった。

「松田さんよ、夢を見る相手は他にもいるよ」

男性清掃人の誰もが、気立てが良くてそこそこ美人の女を物色しながらモップを毎日動かしていた。

その対象は看護師や介護士、事務員から栄養士にまで至っていた。もちろん、ものにしようなどと思つて視線をさまよわせているわけではない。清掃という作業のなかに楽しみを探すのは自然な行動であり、六十の半ばを過ぎても男の性がそうさせているにすぎなかった。もつとも、できることなら挨拶を交わしあうほどにはなりたいたいと淡い期待を抱いてはいた。そんな中であつて達也だけは違つていた。

達也にとつてこれまでとは全く違う世界。旅館の下足番の仕事も大岳病院での清掃人の仕事も幾多の人生を垣間見ることができると。そうした狙いをつけるの選択だった。こうした環境に起きうるさまざま

をテーマの小説を書いてみたいと思つていた。

必ずしも幸せや歓びにあふれた家族だけが旅館にやってくるわけではない。悲しみを内に秘め、造り笑顔で訪れる客もいるはずである。誰もが舌鼓を打つほどに洗練された料理を最後に、翌朝には別れを決意しているカップルが訪れることだつてあるにちがいない。それぞれの事情を抱えながらもひと時の憩いの場としてやってくる客の心情を感じ取ながら精一杯の接客に汗するのも悪くはないと達也は推測していた。大岳病院とて同じである。誰もが望んでこの病院を選択しているわけではない。因果によつて病み。その家族が、それぞれの事情の中で悩み、苦しんだ末での決断だったのかもしれない。面倒なことはごめんとばかりに姥捨て山のごとくここに放り込んだ家族だつているかもしれない。行くあてもなく生活保護の名のもとに病床に横たわつている患者もいる。しかし、どの患者も自分の意思で大岳病院にやつてきたわけではない。季節の流れや時間の流れを五感で味わい飲み合うことを神によつて奪われ、最後の居住空間として与えられたのが大岳病院

なのだ。ベッドに横たわり、ただただ天の意思が下るのを待っているにすぎない。

達也は病室の清掃をしながら横たわる患者のこれまでの人生に思いを馳せずにはいられなかった。

とりわけ、東棟の二〇三号室の窓際のベットに横たわる牧田キヨにはなぜか想像の念が切れることなく湧いた。四人の老婆が横たわる病室の中にあつてなぜ彼女だけに興味がわいたのかは達也にもわからなかった。彼女の人生はどんなであつたらうと思いつながらいつもモップを動かしていた。そんな時、ナースセンターの清掃に入った達也の目に、テーブルに広げられたカルテの中から牧田キヨの名前が飛び込んだ。昭和七年生まれとある。

「この六月で八十三になったのか」

「梅毒？ パーキンソン？」

多くのことが記載されている中でこの記述だけが達也の脳をかすめた。どんな状態であつても患者のカルテを盗み見たことに気付かれれば大目玉ぐらいではすまない。常識的にも許される行為ではないこ

とはあきらかだ。偶然などとの言い訳も許されない。偶然などにはありえないのだ。わずかではあつてもそこには好奇心の名のものと行為がマイクロの心の隙間に入り込んでくるからだ。数人の看護師たちがせわしなく作業をしている中で眼球が捉えたわずかな情報。いつか牧田キヨを主人公に仕立てた小説を書いてやろう。床の染みに力を込めてモップを動かしながら達也は声にだすことなく口にした。

牧田キヨには達也がこの仕事を始めてから誰一人見舞客は来ない。ベッドの枕元のネームカードには入院月日が記載されている。もうこのベッドに横たわつて九年を迎えようとしている。微かではあつてもこちらからの問いかけに応えることができるようでもある。両足は菱形を描くかのように曲がり、足の裏がくつついているかのようだ。両手はタオルを握りしめ胸の上に置いている。自分の意思でどちらも動かすことはできない。もちろん咀嚼もできない。鼻にはチューブがつながっている。

達也は清掃のための入室時にはそれとなく、この老婆に視線を投げる。大きく見開いた目がどことな

く愛らしい。二か月に一度の散髪。乏しい白髪ではあっても短く切り揃えられたボーイッシュな髪形がよく似合う。きつと美人だったにちがいない。

「失礼しまーす。キヨさーん。おはよう」

二人の介護士が口腔ケアのため入室してきた。

その声は明るく優しさを感じる。

達也は「おじやましました」と言葉を残し、そそくさと病室を出る。その背中にとげのある視線が突き刺さる。

清掃人が一日に受け持つ病室の数は二十五室ほど。

クロス掛けとモップ掛けの二回、病室に入らなければならぬ。それぞれが数分の作業である。だからといって病室に入る時間帯が自由なわけではない。

朝の八時から十時と決められている。患者の朝食が終わるのを待ってのスタートとなる。介護士らによる口腔ケアなどが八時四十五分から各班に別れ、

いっせいに行われる。清掃人はこの合間を縫うように病室に入る。入り口から中の様子を伺い、看護師や介護士が入室していればやり過ぎなければならぬ。あらためて出直すことになる。どちらが先に

入室したかなどは問題とされない。相手にも時間に束縛された作業スケジュールがある。最優先とされるのは常に患者へのケアであって清掃人は刺身のつま以下の存在でしかない。彼女らの目に留めるべきは患者であって清掃人への気配りなどは皆無に近い。ためらうことなく病室に足を踏み入れ、狭い病室の通路に介護カートを引き入れて入ってくる。その結果、モップを抱えた清掃人は爪先立で壁に背中をこすり付けるようにカートをかわし病室を出ることになる。

「ケアが始まる時間も巡回の順番も決まっているのに何でかち合うのよ」

一階の談話室での介護士や看護師の休憩時間に決まって繰り返されるフレーズである。

「男の人はまだいいわよ」

一通りの清掃が終わり、洗い場でモップと格闘しながら大垣さと代が愚痴をこぼしはじめた。

「そうよ。看護師も介護士も、男の人には遠慮がちでも私たちには容赦なく嫌味な口調を浴びせてくるのよ」

宮崎ふみ子がさと代の愚痴に輪をかけた。この二人が話始めると二十分以上は覚悟をしなければならぬ。しかも、これといつて目新しい話題は少なく、いつも同じ話を繰り返しているにすぎない。

「だいたいね、年寄だと思つてバカにしているのよ」
さと代が口をとんがらかす。

「七十を過ぎてても働かなければならないなんて、それもお掃除。私にはできないわ」

ふみ子が、談話室で繰り返される看護師の口調を真似るかのように語尾を誇張する。

「ああ、やだやだ」

さと代がため息を大きくついて話に終止符を打つ。

「女はねちっこくしつこい。その点、男の看護師や介護士は比較的気遣つてくれる。違ukai?」

せっかくな終つた井戸端会議に津元栄治が再び火をつけた。

「そうね。二階の西の看護主任さん。この病院で唯一の男の主任さん。腰が低くて私たちにまで気遣いをしてくれる。あれでもう少しイケメンだったら申し分ないわね」

間髪を入れずふみ子が乗つてきた。これでまた十分は彼女らのおしゃべりが続くことになる。

「お掃除の人。しゃべつてないで手を動かしたら?」

喫煙所と水場スペースを区切るかのように救急車が停めてある。十五年は経とうかという代物であるが使用可能な状態でもある。だからといつて整備点検時以外には動かす気配もない。この年代物の向こう側の喫煙所から聞き覚えのある声が飛んできた。

井戸端会議の内容は筒抜けなのだ。話が話だけにバツが悪い。誰もが一斉に押し黙り、水音だけがその場を支配する。しばらくして、さと代が救急車の窓を通して喫煙所を向う。三階東の介護士が数人、喫煙に来ていた。それも、うるさ型で通っている三人だ。案の定、夕方には「水場でのおしゃべりの声が大い」と青空社部長の山下修二が事務長に呼び出され頭を下げる騒ぎとなつた。山下は清掃班休憩室の掲示板に事の顛末と今後における注意事項を大きく貼りだした。もつともこうした騒ぎはさして珍しくもない。細かなことにも大騒ぎをし、そのつど事務長に山下が呼び出され頭を下げている。山下の仕

事はパート従業員の管理という名のもと、米つきバツタよろしく清掃人代表者として頭をさげるのが仕事であり、その相手は看護部長であつたり理事長であつたりもしていた。

達也の目には、山下のマネジメント技量の無さが清掃人の質を下げ、病院側からのさまざまな苦情を始め、看護師や介護士からの蔑みの根源を招いていると映っていた。

その一週間後に青空社の行く末を左右するほどの事故がおきた。病室に備えられているエアコンのフィルターを洗うための取り外し作業を津元栄治がしていた時、バランスを崩し脚立から落ちたのだ。「ウウエ」

脚立の倒れる金属音と共に何とも不気味なうめき声が廊下に響いた。何事がおきたのかと数人の看護師と介護士が病室に飛び込んだ。

「あなた！ 何をしているの！」

女看護師が患者の上に重なって倒れ込んでいる津元に向かって声を張り上げた。と同時に津元を押しつける患者を覗き込みながら、医師への緊急連絡と看

護主任を呼ぶようにと一緒に患者を覗き込んでいた同僚に指示を出した。患者がクツションとなって津元には特に異常はない。しかし、事の重大さに顔面蒼白といった面持ちで病室の隅に立、様子を伺うしかない。看護師が、しきりに患者に声を掛ける。が、反応は鈍い。反応の鈍さはいつものことであり、津元の体重が原因とは限らない。外見的に患者に外傷はみとめられない。衝撃による骨折もないように看護師には見られたが医師の診断を待つしかない。患者への処置はそれからである。

「お掃除の人、何をしているの！ 脚立を持って早く外に出なさい」

津元は脚立を抱え、申し訳なきように廊下へと出た。心なしか全身が震えている。病室の入り口に集まって中の様子を伺う介護士たちが入り口の両脇に別れ津元に道を開ける。哀れむかのような視線を投げる者もいれば声にこそ出しはしないが罵声とともに棘のある視線を投げる者もいる。

「あなたたち、業務に戻りなさい」

知らせを受けて駆け付けた看護主任が怪訝そうに

口にする。

事故が起きて三時間後、山下のみならず社長までもが事務長に呼びだされた。何かが起こるごとに談話室の奥にパーテーションで仕切られた商談スペースで待つことになる。そのたびに病院側の審判を受けることになるのだが、今度ばかりはまさに最後の審判との覚悟が必要だった。

指定された時間より十分ほど遅れて事務長が入ってきた。口を堅く結んで腰をおろすと、二人を睨み付けるかのように腕を組み無言のまま身じろぎもしない。数分遅れて理事長と看護部長もしかめっ面ですり寄り。二人ともに、ただただ頭を下げるのみである。大柄な社長が見事までに小さく見える。山下はしきりにハンカチで顔をぬぐう。ベッドに横たわっているのは療養の名のもとに自分の意思では寝返りを打つこともできず死をまつだけの老人である。津元は七十一歳とはいえ九十キロちかくもある。点滴チューブが引きちぎれたことから重大な事故であったことが伺える。ひとつ間違えば老人の命はなかったかもしれない。骨が折れてもおかしくはない。

業務上過失致死、過失傷害といった刑事事件にもなりえるほどの出来事である。医師の診断により患者の様態は幸いにも安定しているらしい。何事もなかったかのように寝入っているとのことではあるが家族には、事務長直々に事の顛末を説明し詫びを入れた。と、唾を飛ばしながら看護部長の強い口調が続いた。

始末書とともに再発防止対策書の提出を命じられて一時間半に及ぶ叱責が終わった。どうやら契約解除だけは免れることができた。この間に二人が下げた頭の回数はギネスものといってもおかしくはない。更衣室で待っていた津元には、山下が病院側から受けた顛末をかいつまんで告げ、その場で解雇を言い渡した。

翌朝にはシフトごとに出勤してきた清掃人を集め、山下が昨日の出来事を報告し、注意を促した。

「十分に気を付けるようにしてどうすればいいのよ。津元さんだつて落ちたくて落ちたわけではないのよ。生活だつてあるし解雇なんてかわいそう」

ふみ子が自分の事のように気の毒がった。

「今後は脚立の使用を禁止するだつて？ 禁止はいいけど高いところは掃除しなくつてもいいつてこと？」

さと代があきれたように口にする。

「いつつもそう。何か小言をいわれると、注意しろだとか禁止だとかだけで、あとは苦情がこないように自分の判断でやってくれつて。どうすりゃいいのよ」

松田が愚痴をこぼしながらモップを絞る。

達也がこの仕事についてからの半年間に多くの苦

情が寄せられた。そのたびに山下から気を付ける。

今後は禁止との指示は出るが後がない。結果として掃除のスキルは求められるがクオリティは低下していく。モグラたたきのような事の処理しかない山下が清掃人の社会的地位を低くしていると達也には写っていた。

「この会社は、苦情がこなければ旧態依然のままの作業方法を繰り返す。そこには精査するとか改善とかの精神は欠片もない」

達也は小さなつぶやきとともに溜め息をつきなが

らモップに手を掛けた。

これまで達也が生きてきた世界は、常に他社よりも秀で、いかにして有利に戦うか。相手に歓びを与えながらより多くの利益を上げる。そのための精査や改善が常に強いられる。それに比べて温ま湯以下の清掃人の環境。社会的地位の向上など求めることさえできるはずはない。いや彼らは愚痴は溢しても地位などとは気にもしていないにちがいない。マネージメントなどは程遠い山下の考え方そのものが全てを物語っていた。

愚痴を言い合い、裏で同僚の陰口を言い合う清掃人。外面図は仲の良いふりをしてはいるが、ちよつとしたことでいがみ合うことになる。これは何も清掃人仲間に限ったことではない。管理者である山下部長との間にもいえることであり、これらが高い離職率につながる。その結果、求人折込チラシの常連企業となっていた。

四月の半ば過ぎになつて清掃人たちが集められ講習会が開かれた。業界規範により、年に一度は従業員の質の向上をはかるべく設けられたチャンスであ

るにもかかわらず青空社では活かされていない。

「今年の計上利益は三万円しか出なかった。このままでは人員を減らさなければならぬ」

山下部長よりさまざまな注意のあと愚痴ともリストラ警告とも取れる発言がなされた。清掃人たちにとつてみれば会社の利益など感心もなく「だから何なの」でしかない。会社側が作成した作業手順に沿って毎日の業務をこなしているにすぎない。残業があるでもなく、経費の節約など無縁の作業である。

もつともそんな処に考えが及ぶような資質をもった清掃人などこの会社にはいない。

「利益が三万円しかではなく、その原因となる無駄がどこにあったのかは精査されたのですか？」

達也が山下部長に質問として投げかけた。違った世界を覗いてみたいとの思いだけから清掃人の仕事に就いた。この半年間、さまざまな疑問を感じてきたが末端の清掃人。会社のやることに口をはさむ立場ではない。ましてやパートの身分であり、会社に愛着もなければ忠誠を誓ったわけでもない。風に舞う木の葉と同じと割り切っていた。

不意を突かれた山下の顔に焦りが見えた。これまでに文句をいう清掃人はいても会社側に対して疑問を投げかけてくる者などはいなかった。山下にしても決算書を社長から突き付けられ「何とかしろ」と、叱責を受けただけで決算書の中身を分析したわけでもなければその原因に心当たりがあったわけでもない。かろうじて残った三万円という金額に驚愕しての発言にすぎなかった。当然のごとく何かの策をもつて口にしたわけでもなく質問が投げかけられるなどと思ってもいなかった。

「いま、精査している最中です。皆さんには、洗剤やタオル、クロスなどの消耗品の無駄のないように気を付けてください。以上」

早々に、ミーティングは打ち切られ、山下はそそくさと外に出て行った。

「何言ってるんだか？ 消耗品なんか会社が決めた量しか使っていないわよね——」

取り残されたかのような状態の清掃人たちを代表するかのようになさと代が憤慨した。

「いや、少ないくらいさ。指示書通りにやっていた

ら交換頻度が高くてめんどくさいから手を抜いてるくらいさ」

「そうさ、だいたい俺たちはパートだぜ」

「人を減らせば手を抜いた仕事になるだけさ」

「病院からの苦情が多くなるだけよね」

「俺たちには関係ないさ。第一どうしようもない。」

吉岡さんのおかげで山下部長の話が早く終わってよかった」

「ほんと——」

清掃人たちは口々にリストラの不安を打ち消すかのように好き勝手な不満をまき散らす。

「ねえ、吉岡さん。精査ってどういうこと？」

ふみ子が外に出ようとしたり達也の背中に投げた。

「結果だけを見て口にしないで、どこに問題があったかを探るってことかな」

達也にはどうでもよかった。ただ利益の上がない原因が清掃人たちにあるかのように向けられたことに腹がたっただけだった。

五年ほど前までは高岳病院の清掃は病院側が募集したパートで行われていたが、管理の都合上外部委

託されたのだった。もともと青空社で三社目となる。どの清掃会社も事務長からすれば気に入らなかつたらしい。契約が更新されることなく入れ替わつてきた。青空社も今年の八月には二年の契約が切れることになる。打ち切られるか否かは事務長の腹しだいということらしい。山下にしてみれば必死に食らいつくしかないのだが厳しい状況のようだ。清掃人たちの間では様々な噂が飛び交っている。

「中病棟の看護師の情報ではどうやら青空社も終わらしい」

「ねえ、契約が切られたら私たちも終わりよね？」

「大丈夫さ、次のところが雇ってくれる。おれはもう五年もここの清掃をやっている」

松田の話によれば、新しい業者に入れ替わつても人の手配もあればこれまでの清掃の手順のことも一からでは問題も多く、引継ぎの名目でそのまま雇ってくれるとのことらしい。もともと十数人もいれば何人かは二・三か月後には「あんたはいらない」と言われるらしいとのことだ。その前に新しい清掃人を募集することにはなるらしい。

達也には不思議だった。契約が打ち切られる原因を作っているのは清掃人たち本人である。その本人たちが残って事業所だけが替わってゆく。本質的なことが替わるわけではない。達也には業者が入れ替わる裏に何かの事情があると探りを入れずにはいられなかった。古参の掃除人や警備員、看護婦や介護士などに数日をかけて探りを入れた。

「あの事務長、看護部長が連れてきたのよ。証券会社を定年退職してここに。それまでいた事務長はグループ会社の老人ホームに飛ばされた」

この病院のトップは院長でもある理事長の下に看護部長、その下に事務長。この三人が仕切っていた。そのほかにも役職はあるもの特に権限が与えられているわけでもなく組織管理上肩書がついているに過ぎないといってもよかった。現に、この三人の意向次第で昇格も降格も自在なのだ。理由なんて何でもよかった。職員出入り口の掲示板にはそれを知らせる辞令書が年に数度は貼りだされている。

「看護部長と理事長はおなじ穴のむじなつてとこかな」

前の事務長に可愛がられていたという女事務員が教えてくれた。どうやら今の事務長を毛嫌いしているらしい。

「もつとも、看護部長と事務長も同じね。色んな噂がたえないわよ。セックスは伴わないらしいけれどね。事務長は看護部長の投資顧問といったところじゃない。もずいぶんと儲けさせてもらってるって噂。もちろん理事長もよ。」

「そうなんだ」
「だってこの病院の月の売り上げいくら知っている？ 設備は旧式、特に何か最新の医療が必要でもない。設備は技術もいらぬ。いまだ患者のカルテを台帳で管理している病院なんてないわよ。回診やケアの内容はその都度パソコンに。点滴や投薬は患者の付けているリストバンドのバーコードと照合。これが普通よ。ここでは復唱しながら台帳にボールペンで・・・バーコードなんて無縁」

総合病院からこの病院に移って半年あまり、時代遅れの看護に早くも次の勤め先を模索しているとばかりに看護師が話を続けた。

「理事長は長者番付の常連よ。利益を上げることしか考えていないのよ」

「看護部長は理事長が引つ張ったって聞いたけど？」

「そうよ。あの二人できているんだから。男と女」

「その話、本当なの？」

「……」

どうやら噂の域を出ていないようだ。看護師は達也の問いに口ごもったが、すぐに話題を変えるかのように口を開いた。

「事務長が来たのが五年前。半年もたたずに栄養部とリネン部は数人の社員を残して。パートさんを解雇して業者委託。リネン部の下に清掃班があったのよ。業者との契約は二年。中には一年のところも。クレームをつけては契約を打ち切り、新しい業者へ。その都度、委託金額は百万単位で下げられる……」

「詳しいね」

「だって、談話室で話がつまると最後はこの話。次はお風呂屋さんだとの噂が……」

思った通りだった。業者契約は打ち切っても清掃

人は残す。作業手順の継続とクオリティを維持するための処置だった。この病院にはさまざまな業者が入りしている。日々の物品に始まり、病院のメンテナンス。個々の業者すべてに価格を競わせながら契約の継続可否と業者の入れ替えを事務長一人の権限で行われていた。看護師や介護士はその都度、いくらで契約させられているかなどの情報を仕入れていた。どこにでも情報通はいるものであると達也は感心した。

患者たちには週に二回の入浴時間が設けられている。入浴といっても、患者をクレーンで吊るし、そのまま浴槽に首まで沈める。三分ほどですべてが終わる。設備の維持を含め十五人ほどの部員すべてが契約社員とパーで賄われているが、三個の浴槽から湯気が立ちあがる環境下でのハードな作業のわりには時給が安い。夜勤も残業もない。結果として手取りは少なくこの病院での部署別離職率は常に一位となっている。毎月二回は掲載される求人広告費と人員管理のための手間が事務長の頭痛の種になっているのが噂の根源らしい。いづれにしても業務委託さ

れた場合においてもその作業に従事するには国家的な資格がついて回る。

その点、清掃については従事者そのものにはなんら国家的な資格を必要とはしない。だれでも良いことになる。使用側は、健康で労働単価の低い層を集めて従事させる。結果として行き場のない労働者が定年退職をした高齢者が集められることになる。

「そこのお掃除の人」

ナースセンターの床と格闘しているふみ子の背中に看護師が声を掛ける。

ふみ子はこの仕事について五年になる。五年もいれば声を掛けてきた看護師が誰であるか聞き分けることもできる。顔を見るたびに数えきれないほどの挨拶も交わしてきた。清掃人といえども身分証を胸につけている。名前を知らないはずはない。清掃人が看護師や介護士に声をかける時も名前で呼ぶことはない。「看護師さん」と口にはするが尊敬の念や敬愛の念を込めている。しかし、彼女らが掃除人を呼ぶ際の「お掃除の人」には、それを感じることはできない。哀れみだとか蔑みの糸を引いている。

ふみ子は、年が明ければ七十歳の声を聞く。いたって健康ではあるが、肌の艶はなくシワもシミもある。髪は薄く、染めてはいるものの老婆の印象はぬぐえない。

「悪いけど、この机を動かすからお掃除してくれない？ もうしわけないわね」

言葉は丁寧であつても心のこもっていない響きはおなじである。

「いいえ、いいんですよ」

ふみ子は、笑顔を振りまきながらモップを構える。数人の看護師が机を持ち上げ廊下に出す。何十年も前のスチール製の机は重い。数年越しの申請が通つてようやく新しいものと入れ替わるらしい。

「ねえ、聞いてよ。私、来月には四十よ。やだやだババアよ」

部屋に戻ってくるなり看護師が口にする。悪気があるわけでもない同僚どうしの会話かもしれない。ではあつてもふみ子の耳に届かぬはずはない。

「ああ、いつまでここにいるのだろう——。四十になる前に他の病院に移ろかな」

「大丈夫よ。私たちには強い味方が付いているのよ。看護師免許さえあれば六十だろうが七十だろうが看護師として働く場はあるわよ」

かみ合っていない看護師同志の話ではあつてもふみ子の胸に幾つもの小さな棘が突き刺さる。だからと言つて顔色を変えることなく掃除を済ませ「お邪魔しました」と口にし、頭を下げてナースセンターを出る。

「わたしだつて好きでお掃除をやっているわけじゃないわよ」

汚れたモップの入ったバケツとクロスを両手に階段を降りるふみ子の口から漏れる愚痴が続いた。

「四十でババア——。冗談じゃないわよ」

達也を除く青空社のパートの誰もが、「できればもっと時給の良い仕事を」「幾多の保障に守られた社員待遇を」と、望まないわけではない。しかし清掃人のだれもが、学歴もなければこねも持つてはいない。その上、高齢ときている。いかに形式とはいへ入社試験が伴う企業や、保証人を必要とする職業

に就くには壁が高すぎる。不満がつのれば愚痴もでる。毎日、幾度と繰り返される階段の上り下り。一日中、動き回るのに必要な体力。乗り越えなければいけないものが多くはあつても贅沢などは言つていられない現実が目の前にある。持ち合わせていないものを補うには、朝が早くても、人から蔑まされても、そこに飲びを見つけるしかない。

「竹中さん、ついにアメちゃんを貰つたよ」

十時の休憩に更衣室に戻つてきた松田の口元がいつもになく緩んでいる。松田の昨日のシフトは遅番だった。町が流す広域放送のスピーカーから「ゆうやけこやけ」のメロディが流れると同時に医局の掃除を始める。遅番シフトの締めの仕事となる。昨日の宿直は秋本医師だったらしい。その秋本医師がアメをくれたと喜んでいたので。

高岳病院に勤務する内科医、秋本医師は全従業員の中で最も高齢になる。八十歳を超えてもなお、現役の医師として他の医師と変わることなく毎日の巡回も宿直もこなしている。風体はどこから見ても八十数歳に見えるが、細身の小柄な体を使つての

ボディーランゲージが女の看護師や介護士から見れば、愛くるしいと絶賛なのだ。小さくはあっても理事長と看護部長と同様に、個室を与えられているこの病院の主であり、誰からも慕われるアイドルでもある。

この秋本医師にはもう一つ、人気の元にアメの存在が欠かせない。秋本医師は、好物である不二家のミルキーをいつも白衣のポケットに入れている。個室のデスクのガラス板にはマスコットのペコちゃんの絵がいくつも挟まれている。中には発売初期と思われるかなり古いミルキーのパッケージも見られる。よほどの思い入れがあるのだろう。

「いつも、ありがとう。はい、アメちゃんを一個あげる」

愛くるしいほどの笑顔を見せながら口にする秋本医師のお決まりのフレーズだ。だからと言ってだれにでもアメをポケットから出して差し出すわけではない。ご褒美であり、一人前として認めた場合にかぎり笑顔とともに一個だけ差し出すのだ。そのハードルは低くはない。しかも一年に一回だけである。

もつともアメを差し出す真意について、秋本医師が口にしたわけでもなく誰も知らない。看護師や介護士の間でそう噂されているにすぎない。

大岳病院で働くすべての従事者ともなれば三百人をはるかに超える。今年には誰にアメの恩恵を授けたかを覚えていふということだ。それだけにわずか一個のアメとはいえそれを手にした者にとつて、自慢せずにはいられないのだ。竜也がその恩恵を受けたのは清掃を始めて一か月ほどがたった時だった。その時にはアメの意味を達也は知らなかった。わずかに一個だけのアメに戸惑いながら「おもしろい先生だ」と、声にだすことなくつぶやいたことを思い出していた。

昨年、青空社でアメを手にしたのは二人だけである。今年においては、入社早々に達也がアメを受けたのに続いて松田が二人目となった。

「あの先生は俺たち清掃人にも気遣ってくれている。ほんと、うれしいよね」

松田は大事そうに、もらったアメをポケットにしまい込んだ。

「お掃除の人——」

休憩時間にも関わらず、更衣室の引き戸がいきなり開けられ、事務長が血相を変えて飛び込んできた。事務長いわく、理事長室がゴミでいっぱいだからすぐに掃除をとのことらしい。達也は隣の女子更衣室兼休憩室でくつろぐリーダーに声を掛け、二人で理事長室に向かうことにした。事務長は先に理事長室へと駆けて行った。

「ゴミで一杯ってどういうことですかねえ？ 今朝もいつも通り掃除しましたけどね」

達也には、事務長の言葉の意味が理解できないままにとりあえず掃除機だけを手にした。

理事長室に入ると、いつも本棚の間に置かれていたハンガーラックが引つ張り出されていた。

「申し訳ないね、休み時間なのに。ここの埃を掃除してもらえないかね」

絨毯がラックの足で少しへこんでいる。わずかではあるが確かに綿埃が肉眼でとらえられる。達也はすぐに掃除機のスイッチをいれた。十秒にも満たないうちに綿埃は取り除かれた。

「どうでしょうか？ ハンガーラックは元の位置に戻しておきましょうか？」

大きな机で執務を続ける理事長に、達也が声を掛けた。

「いや、いい。そのままにして置いてくれ。どうも、ありがとう」

理事長は、掃除の跡を確認するでもなく書類に目を落としたままだった。事務長の姿は、すでに見当たらない。

「何なんですかね？ あの事務長の騒ぎよう。何事かと思えばおおげさな……。理事長に言われて事務長が大慌てしただけじゃないですか——。あの事務長、あれは完全にポチ状態だな」

どこの企業にもいる。君臨するオーナーに執事の如くひれ伏すやから。やからの地位が上なほど、その地位を守るべく下位の者には厳しくあたる。出入業者ならばさらに誇示すべく執拗なまでに上から目線の厄介な存在となる。

同業他社との競争商圏ならば生きながらえることは困難であつてもこの病院においては競争などとは

無縁の環境にあった。平均寿命の影に隠れた介護を必要とする老人の増加。供給が追い付かない社会的な現状のなか、世間から批判されない程度の設備と対応ができていれば秀でる必要などはない。

出入り業者においても同様だった。そこそこの清掃業者とそこそこの清掃人によつて外見的な身綺麗さえ確保できればいいのだ。追及すべきはコストとなる。定期的に業者を入れ替えることによつて提出される見積もり書に強引とも思える値引きを要求し、最低限のクオリティを要求する。もつとも契約が完了し、清掃が始まれば徐々にそのクオリティを上げるべく要求が付加されて行く。苦情という形で。そしてその要求を直接的にぶつけてくるのが、看護師であり介護士なのである。

高岳病院というクライアントの実態は三百人を超える彼女(彼)ら一人一人がクライアントであることなのだ。それぞれの性格も違えば要求レベルも違う。真逆の要求さえなされることもある。それらのすべては定期的に行われる改善を旗印に向上委員会の集まりの席で公の要求に衣替えする。直接、自分たち

が何かをするのではなく、出入り業者に何かをさせることによつて自分たちに降りかかる実害を軽減し、向上委員会の面目を保つことができると知っているのだ。その意を汲み代弁するのが看護部長であり事務長なのだが、そこそこの清掃業者の持つ発言力など竹光にも劣る切れ味しか持ち合わせてはいない。出される要求は黙って呑むしかないのだ。

「そこのお掃除の人——」

三階のナースセンターから身を乗り出し、廊下の拭き掃除をしている達也の背中に今日も投げられた。「はい、なんででしょう」

了